

2021 年秋季研究発表会を終えて (K. Morimoto) [J]

10月2日・3日に開催された2021年度の秋季研究発表会（東北大会）にちなんで何かコラム記事をとという御用命をいただいた。物理的な集会場所のない遠隔開催で「主催校」と称するのは違和感もあるが、私の所属する東北大学文学研究科ドイツ文学研究室が東北ドイツ文学会の事務局になっている関係で、このような形になったのだろう。準備の中心を担っていただいた嶋崎啓教授と清水翔太助手に心から感謝したい。もちろん斎藤支部長、川村支部理事をはじめ多くの先生方にもご尽力いただいた。ご苦労さまでした。ちなみに東北ドイツ文学会は、歴史的にずっと日本独文学会東北支部を引き受けているが、前者の会員すべてが日本独文学会の会員であるわけではなく、別組織である。

私が日本独文学会の会員になって40年近くになる。今振り返って特に思い出深いのは2003年の前回東北大会で、このときは私も実行委員として準備作業を担った。「国際学会」なるものが同時並行で開催され、会場手配やポスター作成を手伝った記憶がある。翌年に国立大学法人化をひかえ、アカデミズムに対する国の圧力が強まる中で、生き残りをかけた学会活性化の一環として実施されていたのだと思う。

実際、状況は厳しかった。先行する1990年代からの官製「大学改革」、いわゆる教養部廃止や大学院重点化に伴って、大学におけるドイツ語専任教員のポストは減り続け、日本のゲルマニスティークはそもそも存続しうるのかという危機感が色濃く漂っていた。わが国のこの分野は、高等教育機関におけるドイツ語教員がその支え手であったことは言うまでもない。そのポストの削減は現役世代の減少だけでなく、次世代研究者育成の困難を招く。特に地方においてこの危機は深刻で、私が1996年に東北大学に赴任して以来、地方学会ロビーでの会話はもっぱら授業とヒトが減らされた的な話題ばかりだった。学会員数も漸減の一途をたどった。

こうした中、地方支部の苦境は全国レベルで無視できないものになっており、特に秋の全国大会の引き受けに伴う負担の大きさが問題視されていた。細かい話だが、懇親会で生じる赤字は支部がかぶるといのがかつての慣行で、財政規模の小さい支部の重荷となっていた。2003年大会の最大の目標は、懇親会で赤字を出さないことだった。幸いこれは何とかクリアし、その後この慣行も見直されたと聞いているが、要するにこうしたことは、毎秋の地方での全国大会が一種の「お祭り」として賑わっていた時代の名残りである。支え手が多ければ、地方の責任で「全国」に貢献したいという意欲とプライドもわき起こるだろう。しかしそれは20世紀までの話である。

2021年度の東北大会もリアル方式で引き受けるのは難しかったが、コロナ禍のもとビデオ会議による実施となったことで乗り切れた。いろいろと知恵を貸していただいた実施本部の皆さんには心から感謝したい。今回の様子を眺めていて、これは応急的な対応というよりも、むしろ新しい時代への適応戦略を模索するチャンスなのだと実感したところである。遠隔方式が恒常化すれば、地方支部が研究発表会を担い続けることもできるだろう。と

いうより「地方」という観念そのものに意味がなくなる。

誰かが自分の研究を公表し、それについて議論するというイベントが、特定の物理的場所や日時に縛られるべき理由はない。確かに対面の良さ、身体的に居合わせることでもたらされる機微な情報共有や親密さの醸成といった利点はよく理解できるし、とりわけ教育現場では対面が必須だと思う。しかし、研究発表会は議論を交わす場であって、懇親が主目的ではない。コスト・バランスを考えれば、研究交流のようなものはネットワークの公共空間を活用するのが自然であろう（いや、「遠隔懇親会」でさえ結構「行ける」ことを今大会は実証した）。開催の時期や頻度の制約は小さくなるし、発表者を学会員に限定する必要もなくなる。目的はゲルマニスティークの発展にあるのだから、事前の審査をクリアする一定水準以上の研究内容であれば、だれが発表してもいいし、だれが議論に加わってもいい。

つまり、これは「学会」というもののあり方が根本的に変わってゆくということだ。しかし考えてみれば、17世紀後半に近代の「学会」が創設された頃、それを支えていたいわゆる「文芸共和国」も、手紙というメディアを駆使してお互いの思想を伝え議論を交わすという形で存在していたのではないか。確かに当時も今も知識人は社会的少数者だから「寄り合う」ためのオフライン集会もあっていいとは思いますが、それが制度的硬直化や権威主義に堕しては本末転倒である。要は、理性を活用できる人間が自由に言葉をやりとりできる場を確保する、ということに尽きる。今日の技術を使えば、そのためにたいした労力や「お金」は要らない。

日本におけるドイツ語教育そのものの前途は暗い。それはまた別に考えなくてはならない重いテーマだけれど、ゲルマニスティーク研究、というより人文学研究が生き延びる可能性はむしろ広がってきているのかもしれない。先見性と柔軟な発想があれば、ネットワーク時代に適応した21世紀型「文芸共和国」を再建する展望も開けそうだ。日本独文学会がそうした新しい発展の道を大胆に進んでゆかれることを、心から期待したい。

森本浩一（東北大学）

0184

作成日 : 2021/12/01